

平成24年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管24K07	氏名	石田 玲奈
研究主題 —副主題—	子供たちが運動に親しみながら体力を高めるための体育学習に関する研究 —小学校低学年で身に付けさせたい動きを明確にした指導—		
所属校	杉並区立桃井第二小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>小学校で子供たちの体育の授業や生活全般の様子を見てみると、身のこなし方が不器用になっているために怪我をすることが多くなっていると感じる。文部科学省の「平成20年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果から、依然として子供の体力・運動能力が低下し続けていることが課題とされている。さらに、同年の中央教育審議会でも、運動する子供とそうでない子供の二極化や運動に親しむ資質や能力が十分でないことが課題として指摘されている。平成24年に文部科学省では、幼児期の運動経験を重視して「幼児期運動指針」を作成し、幼児期の運動の在り方についての指針を示した。東京都統一体力テストの総合評価の結果から、児童生徒の運動不足が推測されており、体格は大型化しているがスキップができない、体をコントロールできない等、身体を操作する機能が低下していると報告されている。</p> <p>また、子供が身に付けておくべき基本的動きや幼児の体力向上に関する先行研究から、幼少年期に身に付けておくべき動きがあり、それらの動きを質的に評価していくことが重要であるということ、また、意図的な体力向上プログラムは、小学校低学年で最も効果的であり、小学校低学年の時期に子供が経験する運動遊びは、その後の運動習慣や身体活動量に影響を及ぼす大変重要なものであり、この時期を大切に考えていくべきであるという知見が得られている。</p> <p>現在、豊かな心や健やかな体の育成のために体育の指導の充実が求められている。本研究では、低学年の児童の発達段階を考慮して、子供たちが体育の学習を通して運動に親しみながら身に付けるべき動きを身に付け、その結果体力を高めていくことができるよう、授業実践を通して効果的な指導の在り方を実践的に検証していくことを目的とした。体育の授業を通して子供たちが運動に親しみながら動きを身に付けていくことは、子供たちの健全な発達・成長の支えとなる。本研究を通して、子供たちが運動に親しむ姿とその指導について究明する。</p>
II 研究の方法	<p>1 基礎研究 研究テーマにかかわる、体力や子供の発達の特性、運動の楽しさ、体づくり運動等について文献を中心に内容を把握し、整理した。</p> <p>2 調査研究 身に付けさせたい動きを探究するため、子供たちの動作や怪我について以下の方法で実態把握した。</p> <p>(1) 子供の観察 所属校にて体育の授業を観察し、子供の動作について姿勢の保持、体の支持、バランス感覚等の実態を把握する。</p> <p>(2) 教員から聞き取り 子供の動作や感覚について東京都内小中学校教員にインタビュー調査を実施する。</p> <p>(3) 子供の怪我の種類と件数調査 怪我の件数の増加と子供の体力低下に関係性があるのかを探るために所属校の児童の保健室の利用者数と怪我の種類を調べ、経年の傾向を把握する。</p> <p>3 実践研究</p> <p>(1) 小学校低学年の児童に身に付けさせたい動きの焦点化</p> <p>(2) 授業実践 所属校第2学年の体育科体づくり運動領域の授業実践（6時間）を行い、授業を分析、考察し、子供が運動に親しみながら動きを習得する指導について追究する。</p>

<p>III 研究の結果</p>	<p>1 基礎研究</p> <p>本研究での体力については、猪飼道夫の定義に依拠して、研究を進めていく。体力は身体的要素と精神的要素から構成され、身体的要素と精神的要素は関連付けて考えていくことができる。</p> <p>また、幼少年期の発達の特性を考えると、小学校低学年の児童には、体幹に焦点を当てた動きが重要であるとともに遊びを通して体の感覚を育てていくことも重要である。</p> <p>さらに、楽しさについて文献研究を基に本研究で考える「子供が運動に親しむ姿」を定義付けた。</p> <p>2 調査研究</p> <p>小中学校教師へのインタビューから、子供たちに身に付いていないと感じる動きや感覚は、姿勢の保持、体の支持、バランス感覚など、自己の問題点と共通していることが分かった。</p> <p>所属校の保健室利用者数に大きな変化はなかったが、学校管理下における怪我の件数は、増加している。また、自分の体をコントロールすることのできない子供が増加しているということから、子供の怪我の増加と体を支持する力やバランス感覚の低下には関係性があると考えられる。</p> <p>3 実践研究</p> <p>(1) 身に付けさせたい動きの焦点化</p> <p>基礎研究で明らかになったことを基に、本研究では「支える」と「バランス」に焦点をあてて体育の授業を行うこととした。</p> <p>(2) 授業実践と分析</p> <p>ア 動きの広がり</p> <p>授業実践を通して、全員の子供に動きの広がりが見られた。その結果、友達と関わり合って運動するとき、運動自体の感覚が面白く繰り返し取り組むとき、友達の良い動きを見つけたときに子供の動きが広がることが分かった。</p> <p>イ 「支える」と「バランス」の動きの焦点化</p> <p>動きを焦点化したことで子供が自ら動きを工夫し、一つの動きに他の動きを組み合わせることで様々な動きを経験することができ、動きを高めることができることが分かった。</p> <p>(3) 授業実践の考察</p> <p>「知る段階」と「身に付ける段階」で段階的に学習活動を行ったことで、子供たちは様々な動きを身に付けることができた。また、子供が動きを工夫して取り組む学習活動は、動きを高めるとともに動きの楽しさを生むことができるという実践の方法を探ることができた。授業実践において本研究で考える体力は高まったということができる。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>子供が運動に夢中になって取り組むためには、子供たちの発達段階に応じた動きを体育の授業の中で行っていくことが重要であり、子供たちがまず経験する基の動きが子供の力に合ったものでなければ、動きの楽しさや次への意欲、動きの工夫・広がりにつながらない。そして、焦点化した一つの動きから子供たちが動きを工夫し、広げていくことで様々な動きを経験することができるという授業実践の結果から、焦点化した動きを子供たちが段階的に経験する学習活動が有効であることが分かった。今回の授業実践では、バランス感覚を経験させるために平均台を用いたことにより、子供たちの動きの工夫が様々見られ、平均台は子供たちの動きを広げるために有効であることが明らかになった。教師が身に付けさせたい動きに焦点を当て、その動きをどう子供たちに提示していくかということも指導する時の重要なポイントである。</p> <p>体育の授業で個々の子供が身に付けた能力や運動に親しむ態度が、実生活において運動を豊かに実践し、子供たちの将来の健康の保持増進につながるよう、子供を取り巻く社会環境や生活環境も踏まえて、今後更に追究していきたい。</p>